

第十九話 図書館があれば蔵書はいらない？

●いま、私が借りている本

私がこの原稿を書くにあたって避けてきた話題が一つあり、それは、図書館の利用術である。ここで「図書館」とは、以後、公立図書館を指すが、これをうまく使えば、一般的な読書人にとって、ほぼ自分の蔵書など不要とも言える。つまり、寅さんふうに言うならば、「蔵書の苦しみ」において、「それを言っちゃあ、おしまいよ」という話題なのだ。

物書きや研究者など、本を道具とするプロはそうはいかない。それが健全な家庭生活を圧迫するほど本を買い込んで溜める、ある種の防波堤になっている。「やっぱり資料となる本は、つねに手元へ置いておかないと」と言い張ることで、なんとかか家人からの攻撃を防御している。しかし、その「手元」にあるはずの本が、けっきょく見当たらず、近隣の図書館へ借りに行く始末だ。あるとわかっていて見当たらない本を借りる。これが私の図書館利用術の極意だ。

なにしろ、架蔵さえチェックすれば、そこには、まちがいなくある、しかもすぐ出てくる。なんと図書館とは便利なんだろう。

そのほか、自分の蔵書で手薄なジャンルの本も、とりあえず必要なものだけ借りて重宝している。

いま、目の前にレシートタイプの「貸出期限表」が貼られているが、これは返却を忘れないための備忘措置である。現在は四冊。『シニアの読書生活』『埼玉鉄道物語』『埼玉県の歴史散歩』『市民の図書館 増補版』とタイトルと返却日がひと目でわかる。なにしろ、部屋中、本が山積、散乱しているので、ここにまぎれたら、雪崩で遭難した登山者を救助するような騒動になる。

借りてきた本は決まった場所に置いておき、この貸出票で確認して返すようにしている。私が借りるような本は、予約で待つ人が重なったりすることもないだろうが、期日までにちゃんと返却するのが最低の礼儀と心得ているからだ。そう言いながら、『市民の図書館増補版』（日本図書館協会）を別の日に借りて、返却し忘れていたことに気づいた。いかんいかん、明日、返しに行こう。

「埼玉」とタイトルがつく二冊は、「日本古書通信」誌に連載している古書店探訪記（「昨日も今日も古本さんぽ」）で、秩父へ行ったときのことを書くための参考資料だ。老川慶喜『埼玉鉄道物語』（日本経済新聞社）は、秩父鉄道および西武秩父線についての記述を補完するのに、たいへん役に立った。税込み三千円強する本なので、ほんの数行の記述のためにわざわざ買うのはもったいない。また、買って手元に置いても、そうそう繙く種類の本でもない。一時期拝借できるのは、非常にありがたい。

●図書館で充実しているのは図書館本

『市民の図書館 増補版』（日本図書館協会）は、著者・関千枝子。図書館について書かれた名著で、副題が「ドキュメント 日野市立図書館の20年」。じつは、ここに登場する元日野市立図書館の創設メンバー前川恒雄が書いた『移動図書館ひまわり号』（筑摩書房）を、偶然見つけて読み、異常なほどの感動を覚えたのだ。その内容について詳述するのは、『蔵書の苦しみ』のテーマとははずれるので避けるが、それから、次々と図書館で図書館に関する本を借り出すようになる。そこで気づいたのは、図書館には、図書館に関する本が充実している、ということだった。

これはある意味あたりまえかもしれない。図書館に置く本を選ぶのは図書館員であり、とくに日本図書館協会が発行する本は、一般性の少ない専門書が多いから、公立図書館が購入しないかぎり成立しないからだ。私は図書館を利用するが、図書館そのものに興味はなかったから、『移動図書館ひまわり号』の衝撃以前は、立ち寄りなかった。日本でこれだけ図書館関連の本が多数出ていることは知るよしもなかったのだ。

いまは行く先々の公立図書館を訪れ、先日は、中央線「茅野駅」（長野県）に隣接する茅野市民館内の図書室が、駅と市民館をつなぐスロープを活用した、陽がさんさんとふり注ぐ、ユニークな建築であることを知り、わざわざ訪ねていったほどだ。

借りるだけではない。こうなると図書館に関する本が次々と目につくようになり、たちまち十冊を超える図書館本を購入するようになった。当初は、図書館をうまく使えば、蔵書は減るというコンセプトで書き出した原稿だったが、話は逆だ。とくに小田光雄『図書館逍遥』（編書房）は、図書館にまつわるあらゆる本や文学作品を次々と紹介したみごとな読書エッセイで、絶対のおすすめ本。教えられることばかりで、すっかり堪能して図書館熱に拍車がかかった。おかげで、ここに紹介された室井光広の芥川賞受賞作『おどるでく』（講談社）や、モスタファ・エル＝アバディ『古代アレクサンドリア図書館』（中公文庫）などを探して、またまた本が増えていく。古本屋で飯島朋子『図書館映画と映画文献』（日本図書刊行会）、富澤良子『TOKYO 図書館日和』（アスペクト）なんて本を見つけると、嬉々として買い上げる。これでは、どうにもしょうがない。

そんな「図書館熱」に罹るとは思っていない、少し昔に遡れば、私はこんなふうに図書館を使っていた。

●情報採集の場

およそ二十年前、フリーライターになったばかりの頃、情報採集の場として、当時在住していた市内の図書館を複数利用していた。ビジネスマン向けの生活スタイルを提言する情報雑誌で原稿を書いていたときは、未知の分野について取材するとき、よく図書館のお世話になった。まだ原稿も手書きからワープロへ移行してまもない時代で、ネット検索も普及していない。

編集部から企画が出て、所属するライターに割り振られる。これが水虫の治し方から、夫婦は別々のベッドで寝たほうがうまくいくななんてネタまで、じつに種々雑多で、扱う分野は広範囲であった。私は、いちおう教壇に立った七年と、上京して雑誌社で編集者を務めた社会人としての経験があるにはあったが、関心の範囲は狭く、取材執筆で振り当てられた分野は、ほとんど何も知らないに等しかった。雲をつかむような話、とはこのことだ。

そんなとき、とりあえず図書館へ行って、知りたい分野に該当するジャンルの棚の前に立てば、なにかしらの情報を得ることができた。また、その分野について、誰が書いているか。著者をチェックすることで、それが取材対象になったりしたのだ。

「資料の本はバンバン、買っちゃってください」と、羽振りのいい出版社では、担当編集者に言われていたから、図書館でチェックした本は、後日書店で手に入れた。だいいち、著者に会いに行く場合、図書館で借りた本を持っていくのは具合が悪い。ちゃんとご著書を買わせていただきました、という姿勢を見せるのが、取材者としてのエチケットだろう。

またありがたいことに、公立図書館では、市内に分散する各館を統括して蔵書を管理し、検索できる機能があることだ。これは、自宅からもアクセスして検索が可能。私なら「国分寺図書館 検索」というサイトをブックマークしておいて、ひんぱんに蔵書の有無を確認している。市内の図書館になくても、たとえば日比谷図書文化館とも連携し、そちらにある場合は、地元の図書館を通じて借り出せるようだが、そこまでの手間をいまのところは私は取っていない。

最寄りの館になくても、市内の別の館にあれば取り寄せてくれるし、A館で借りた本をB館に立ち寄ったときに返すのも可能で、この相互の融通は利用者にとってすこぶる重宝だ。

●閉架にシブい本あり

ここでちょっと、図書館を利用しなれていない人に耳よりの話を。というのは、図書館の書蔵する本は、本棚に並んでいるだけじゃないのだ。自宅からでも館内に設置された端末からでも、いろいろ検索してみればわかるが、目当ての本が、ときに「閉架」と表示されていることがある。これは、館内で自由に閲覧できる蔵書とは別に、たいていは貸出カウンターの後ろにある事務室のような場所に、目に触れないかたちで所蔵されている本がある、ということだ。まあ、使い慣れている人には、これほど字数を割くまでもない話ですが。

ある時、私も大好きで、古本業界ですこぶる古書価の高い物故作家である小沼丹を、「国分寺図書館 検索」でチェックしてみた。ヒットしたのは二十五冊。小沼作品の収録されたアンソロジーや、小沼による訳書、あるいは解説を担当した本などを除けば、閉架扱いは、わりあい最近に出た本が多い。みすず書房から一九九四年に出た『珈琲挽き』と、一九九八年に出た『福壽草』という随筆集。あるいは筑摩書房一九八四年刊の師・井伏鱒二

について書いた文集『清水町先生』、およびその文庫版（ちくま文庫・一九九〇）、未知谷二〇〇五年刊『風光る丘』、講談社文芸文庫『小さな手袋』などだ。まだ新刊書店でも手に入るものもある。

しかし、これで小沼丹の文業の総体を計ることはできない。そこで「閉架」に目を移せば、『椋鳥日記』（河出書房・一九七四）、『藁屋根』（河出書房・一九七五）、『山鳩』（河出書房・一九八〇）、『埴輪の馬』（講談社・一九八六）が、ちゃんと保管されているのだ。講談社文芸文庫で読めるものもあるが、『藁屋根』『山鳩』は全集以外では読めない。

また、検索することによって、みすず書房の「大人の本棚」シリーズの一冊、スティヴンソン『旅は驢馬をつれて』が小沼丹による訳であること（元本は古書価がすこぶる高い）、光文社文庫の「ミステリー文学資料館」シリーズの『ペン先の殺意』と『江戸川乱歩と13の宝石』に、それぞれ小沼作品が収録されていることがわかるはずだ（おそらく創元推理文庫に入った小沼のミステリ『黒いハンカチ』からの収録だろう）。

そのほか、これも古書界で再評価の高い後藤明生が、閉架ではあまり見当たらず、開架では『笑いの方法』始め、『笑坂』、『夜更けの散歩』、『四十歳のオブローモフ』、『行方不明』、『もう一つの日』、『行き帰り』、『めぐり逢い』、『笑い地獄』など続々と揃う。

こういった地味な純文学作家は、亡くなると忘れられ、容易なことでは後世に読者がつかない。利用者の求めに応じて、新しい図書を購入していく以上、棚の確保の問題として、「閉架」扱いになるのはやむをえない。むしろ、利用者が少ないからと、廃棄処分されることを思えば、よくぞ残してくださったという気になるのである。

シブい作家は「閉架」を探せ。私は小沼丹も後藤明生も、ある程度の蔵書を所有していたが、高い値段がつくとわかっているから、全部売っぱらってしまった。だから、この「閉架」リストを見てひと安心。読みたいときには、いつでも借り出せる。